

花ほととぎす

わびしかるときもあらなむ天あめのもと嵐のなかの花ほととぎす  
れん

すでに今ひと葉とてなき梅が枝に春をはぐくむ午後の陽だまり  
蘇生

差しのべる手に一椀の汁の民マグマの怒りいまだ熄まずに  
真奈

生きることの隠れた意味を思う夜ぞ小千谷の友に酷寒がくる  
花

幼児のつぶら眼に見たるもの黄泉平坂、根の堅州国  
かわせみ

優太ちゃん救い出したる隊員の齒見せぬ口元美しと思ふ  
雛菊

約束の本屋まであと一光年。毛糸、紅花、つんでよつんで  
ぼほな

携帯の話し言葉で往き来する「博物誌一冊送ってください」  
花

道の隈いゆきかくゆきカーナビの導くままに古書店までを  
かわせみ

古書店の棚に見つけし「リラと薔薇」ルイ・アラゴンは古く新らし  
真奈

借り出した本のどこにも折り目なく立ち読むようにそっと開きぬ  
蘇生

小津映画折り目ただしき父と娘の会話に秋の日差しやはらか  
真奈

小六月野天にひとり猫という禁欲的に生きなむとして  
花

点になり宙そらに消えゆく風船に許されぬ愛閉じ込めしまま  
かわせみ

卓上の秋の恵みに延々とありとあらゆる死告ぐるラヂオ  
ぼほな

長き腕でたくりよせたる夢あらむ卓上にまどろむマティスの女  
雛菊

夢なれば醒めて忘るることなれど中越地震の余波の荒波  
文枝

地の基もと揺らぐファルージャ逃れ来て天幕テントに眠るモスリムの子ら  
柿の木

束の間の眠りの中に見る夢はやさしき人に守られてあれ  
茉莉花

うたたねのなかに泣きいる声入り来誰とも知らず覚めて驚く

花

ゆめのゆめ、天幕の中に眠る児の夢の花野は万紫千紅

かわせみ

花のない季節の旅の凋落の村ひとつ越ゆ熊は死んだ

花

むらきのも砂と零るるさらさらと星と耀ふ言の葉つらね

ぼほな

台風一過の道の落ち葉の散乱は告げられなかつた数多の言葉

たまこ

散り急ぐ散り急がさるる言の葉もありなむ今朝も冷たき雨降る

ギオ

言葉にて文化伝え来し人類よ我は信ずる言葉の力

雛菊

葉を脱ぎし枝にはすでに硬き芽が光りを放ち春を待つらん

蘇生

絡み合う美男葛のしゅう悪をしばらく見つつかやがて暗澹

花

椎の木に絡まる蔓は「山芋だ掘つてみよう」と秘密めく声

たまこ

さねかつらその紅の濃く猛く見れば眠れぬ鳶とはなりぬ

ギオ

言の葉を翫あそんで理を得べからず蔓枯れて鳴る夕べとなりぬ

花

眉月の夕べ親しき友の逝き終の辺りで唄ふ賛美歌

文枝

夕月のかたぶくさきに心寄すいかにしがたき闇とぞ知るも

寂

後よりたれか呼ばふと振りむけば闇に泛べる白萩の花

かわせみ

恢復の兆しもみえぬ暗闇に運を掴めとあなたは言つが・・・

花

ふいに薔薇身奥に匂ひ咲きそむるドラマならさう悪もいいよね

真奈

花店の日本水仙謙讓に束ねられいまが去り時か

花

親譲りの躁鬱病を持つ我は光射すまで闇底生きる

雛菊

鬱は辛いね躁もさねくたぶれてくたぶれちゃって闇夜閃光

海月

泣きながら光る一縷を手繰れども見えぬ母胎ぞ雪雪しまき

ぼぼな

懸想して衰虫となるほかはなし鬱蒼として森は暗いよ

花

梟の森で見上ぐる月冴やかそは真なる足の灯火

文枝

梟とならんで風を聞く夜は遠く血に染むチグリスぞ思ふ

真奈

灯の下に赤い目をして猫が鳴く野分の風が雨戸を鳴らす

たまこ

「猫飼好五十三疋」の組曲は鯨呂兵衛には鱧八の連れ

真奈

ふうわりと庭の千草にふりそそぐ夕光はわが静けき伴侶

花

風船は皮膚一枚の哀しみに虚空を満たす街流れ行く

ぼぼな

思ひきり生きてみやうと紅をひき優しい虚空に爪立ててみる

真奈

今度こそと飛ばした綿毛「届いた」と海の知らせはまだ返らない

たまこ

今度こそ視野から外すと決意して仰げば風が梳きゆく黄葉

花

細やかに書くことなどはなけれども手になじみたる手帳求めり

蘇生

選びかねて迷ふもたのし来年より仕事を始めむ私の手帳

たまこ

エッシャーの手帳を開く午前2時読んでいるのは私だろつか

ぼぼな

うず高く積みたる黒き手帳には塵積み来たるわが日々がある

蘇生

吾が罪の前に生まれしキリストの福音静かに待降節

文枝

十二月埋る予定は通院日科なくて死す科ありて死す

海月

極月や三十一かぞふ一夕に寒き月など愛でたきものを

蘇生

日だまりに寒月さんのヴァイオリンついうとつとと吾輩は猫

真奈

余念なく毛繕いするわが猫の五指ひらくときむめのようなる

花

五指ひろげ幹を抱けば霜月の林にまぎれわれも樹となる

かわせみ

「五本指で数をかぞえ口を知らず」不幸な人間棲む大都会

真奈

東京の空の下なる病院の屋上にゐて時を貪る

文枝

昏寝てふ情眠貪り月も出たんだかなあと笑ふしかない

海月

ミモザの花咲きあふれいし夢の中こころ枯るるなど目覚めて思う

花

ミモザの花もすでに散りみむ別れしはパースの街の早春のころ

たまこ

銀座より海見ゆる日の「みもざ館」ロゼエを真似て啜る珈琲

真奈

火の如き会いならざれど君といて死ぬほど苦き珈琲を飲む

花

検診のオールマイナスなんて嘘いつもと違ふ珈琲の味

文枝

二夜三夜読みてかがなべ夢十夜、君と酌みたき朝の珈琲

かわせみ

珈琲を飲みながら読む言説のふかき無意味を君しるやゆめ

花

くるくると四つ葉のクローバー回しつつ君には無意味なことも楽しく

たまこ

無意味なることは何にも無いなどと何とわたしは無意味なことを

ぼぼな

無意味なることこそよけれ簾々と冬樹の梢うれの風を聴きつつ

かわせみ

「寥々と風吹く朝寄りゆけば冬芽の貌は「ね」に似ている

花

小庭にはわれと同じく冬暖の光りをあびて冬芽つややか

蘇生

慌ただし師走の庭へ目をやれば万両の赤連ねつややか

雛菊

憂きことは浮寝の鳥にいささかの佳音とどけむ冬桜さく

花

思ひ出をいくつも連れて百合鷗が今年も河口に冬陽を返す

たまこ

掌に大いなる夢握りしめインター歌ふ罅われし空

真奈

一切を遍く包む天空へ声なき声の祈り放てり

文枝

叶ふことを願へば机に一つ置く花梨の香にも息詰まりさう

たまこ

くもりなき冬青空に願はくば小春賜はせ罹災の地には

蘇生

クシユクシユと猫が風邪ひく小六月榎櫛酒のんで眠っていないさい

花

窓に射す冬陽の中の白猫は一度も外へ出たことがない

たまこ

来し方や視しもの霞む窓越しに天使の梯子しばらく消えず

花

朝霧を解き放ちつつ昇りゆく虹にも雌雄めをのあるといふこと

かわせみ

陽だまりの土手に楽しむ孤独あり突と拓くる天使の梯子

文枝

天国に裏階段もあるものを半音階の虹微笑んで見ゆ

真奈

「天国への梯子」は誰の発想か足悪き母はどうしたらいい

たまこ

ギター弾く君よ一度は弾いたかい ZEP のイントロ Stairway to Heaven

ぼぼな

散瞳薬点眼しつつ朝まだきこころ鎮めて聴く "Orinoco Flow"

花

かつかつと夜の深さに磨かれて地に屹立と石畳踏む

海斗

群雲のいくつか過ぎし漆黒に冬三日月は鋭く冴えり

蘇生

天空の底さへ氷る月を見ゆ冬の断章書き綴る夜は

真奈

ドキドキと胸躍るもの欲しいだけ今夜見たいな双子座流星

雛菊

いましばし生きて何視む眼疾の加療の日々は自浄のごとき

花

生かされて四年過ぎ越す自らの明日に贈るクリスマスローズ

文枝

今を生きこの世の花に逢ふことは雅に遊ぶこころとぞ知る

真奈

なかなかこれぞと思うことなくも過ぎてままよと是も好日

蘇生

左目の施術の朝友もまたつつがなくあれ雪中花匂う

花

桃李和歌連作百首歌集

第六一〇一首より六二〇〇首迄

平成一六年一〇月二四日より平成一六年二月一八日